

カルビー株式会社 プレスリリース

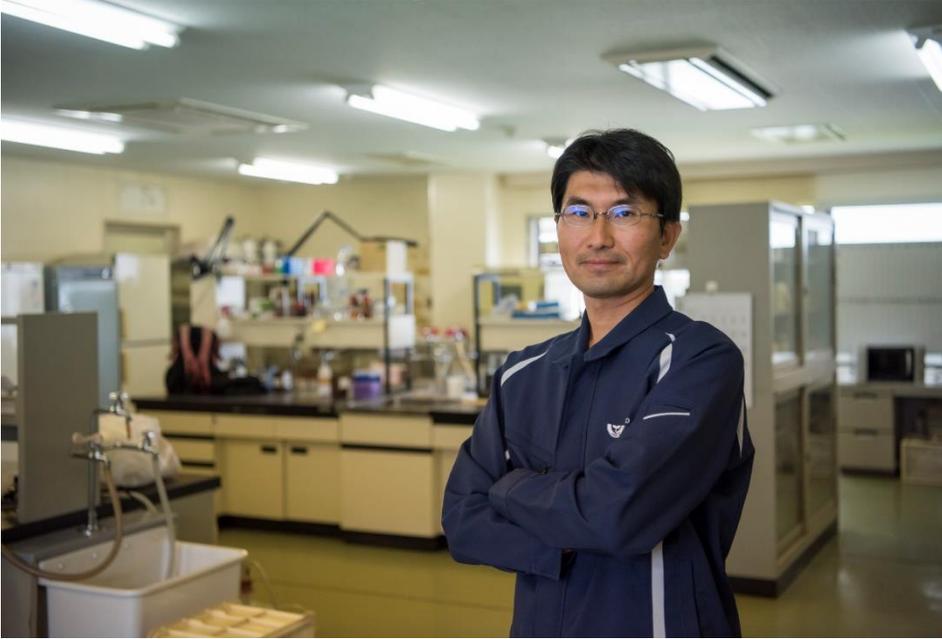
【新品種のじゃがいも「ぼろしり」、作付面積が昨年対比 175%アップ！ 新品種開発にチャレンジする理由をオウンドメディア「じゃがいも Diary」にて公開】 添付資料

【インタビュー詳細】

取材・文／大橋博之

撮影／河野英喜

「ぼろしり」の開発では、見極めが大事だった



津山睦生さん（カルビーポテト株式会社 馬鈴薯研究所 品質開発課 課長）

——なぜ、じゃがいもの新品種、「ぼろしり」を開発することになったのでしょうか？

津山：「ぼろしり」は「ポテトチップス」の原材料として開発がスタートしました。

スーパーなどで売られている「男爵」や「メイクイン」といったじゃがいもは貯蔵すると糖分が増えて甘みが増しますが、ポテトチップスの場合、糖分が高いと油で揚げたとき焦げて味も落ち、見た目も悪くなります。そのため、糖分が低いじゃがいもを開発する必要がありました。

また、「ジャガイモシストセンチュウ」という害虫や「そうか病」といった病気の問題があり、それらにも強い品質のじゃがいもが生産者から求められていました。

さらに、我々は生産者から調達したじゃがいもを貯蔵し必要な時に製品にするのですが、長期間貯蔵しても品質が変わらないということも重要でした。そうした課題を改善するため、2003年から開発に取り組みました。



貯蔵庫の扉を開けると、じゃがいもがびっしり！（貯蔵中は蛍光灯を消灯しています）
収穫されたじゃがいもは、貯蔵庫で長いものだとおよそ9カ月間、貯蔵されます

——津山さんは新品種の開発にはいつから関わっているのですか？

津山：私は2006年からです。元々は開発とは関係のない部署にいました。品質開発課に移動になると聞き、子供の頃から、という大げさですが、品種改良やバイオテクノロジーには興味はあったので、夢が叶ったと興奮しました（笑）。

——新品種の開発で難しいのはどのようなことでしょうか？

津山：開発は最初に2～3万の種を蒔くところから始まります。春に種を蒔いて秋に収穫する。その栽培期間で生育をチェックし、収穫したじゃがいもを調査し、優秀なじゃがいもだけを残していく。そのじゃがいもを翌年にまた植え付けし、さらに調査をして、また絞り込む。この工程を10年以上繰り返して、優秀な品種を見つけ出します。その調査の段階で見誤ると本当はすごい品質になる能力のあるものを見落としてしまうことになりかねません。その見極めが一番、難しいところです。

もちろん、私以外にもスタッフは4人いるので意見交換をして最終的に選別しています。



研究棟の横に作られた、じゃがいも研究畑。じゃがいもの病気について、研究を行っています

——これは残したかった、ということはありませんか？

津山：それはありますね（笑）。5 人のスタッフはそれぞれ何を重視するか？というポイントが微妙に違います。非の打ちどころがない品種は誰もが賛成しますが、どの品種にも一長一短があり、この特性は優れているけれど、こういった欠点がある、といった場合は悩みます。メリットとデメリットを考えるとメリットに着目するか、デメリットに着目するかと言ったとき、私としては「このメリットは捨てがたい」と思うことはあります。

——それはこっそり家に持って帰って植えたり（笑）。

津山：家ではできませんから、試験圃場として隅で植えることはあります（笑）。実は「ぼろしり」は途中で何回か振るい落とされそうになったことがあるんですよ。というのは最初、糖分チェックの段階ではそれほど数値の良い品種ではありませんでした。ところが後になって実は病気に強かったとか、味が良かったということがわかりました。最初は注目していなかったのに「この品種は実はすごいんじゃないか」となったんです。逆に、最初注目していた品種がダメだったということもあります（笑）。

——やはり、見極めが難しいんですね。

津山：「ぼろしり」の系統番号は「C03337-63」と言います。C03 とはカルビーポテトが 2003 年に交配したという意味です。2003 年の 37 番目の兄弟のさらに 63 番が「ぼろしり」となりました。最後まで残らなかった兄弟がたくさんいます。ちなみに、「ぼろしり」というネーミングは十勝にある日高山脈の主峰である幌尻岳（ぼろしりだけ）から取りました。「ぼろしり」とはアイヌ語で“大きい山”という意味があります。大きく育てて欲しい、という想いから名づけられました。

今後も新品質のじゃがいもをリリースしていく

——2016年から生産が始まり、今年2017年はどうだったのでしょうか？

津山：生産者からは良い評判を頂いています。病気に強い、量が取れる、というのは期待通りでしたが、「ぼろしり」は掘って選別するとき不良品があまりないと言われました。粒ぞろいで、サイズも規格に収まる、外観にも異常がなく、捨てるものがない。だから、収穫作業もスムーズ。「この品種は楽だ」と生産者に喜んでもらったのは嬉しかったですね。

——今後もぼろしりの生産量は増えていくのでしょうか？

津山：2016年は約200ヘクタールでスタートしました。今年、2017年は約350ヘクタールに拡大されました。来年、2018年は500ヘクタールを超えると考えています。面積は順調に伸びています。

現在は「トヨシロ」「キタヒメ」「スノーデン」の3本柱の状態ですが、「ぼろしり」の生産量が増えることで4本柱になります。これでさらなる数量が期待できるので、安定供給に結び付きます。

また、「ぼろしり」が「ジャガイモシストセンチュウ」と「そうか病」に強い品種だということで、「ジャガイモシストセンチュウ」と「そうか病」が原因で作付けができなかった生産者から、これなら扱えると喜んで頂いています。いままで作れなかった畑でも作れるので、面積も増えるものと期待しています。



「ぼろしり」の形状は俵型で凹凸（おうとつ）がないので、皮がむきやすい。また、中身が空洞になる生理障害も少ないので、規格品が収穫しやすい

——もう、次の新品質のじゃがいもの開発にも取り掛かっているのだとか？

津山：開発の立場では「ぼろしり」はもう、終了したプロジェクトとなります。もちろん、「ぼろしり」は「ぼろしり」で今後、普及し大きく育てて欲しいのですが、我々は常に新しい品種の開発に取り組んでいます。

「ぼろしり」を伸ばしていく、というより、新品種をどんどん出すことによって生産者には良いものに置き換えて頂きたい。「これを使ってください」では選択肢がありません。生産者にとってもカルビーにとっても消費者にとってもメリットのあるものを増やしていきたいと考えています。

実は来年には試験栽培を終えて一般栽培に移行できる新品種が用意されています。開発には十数年かかりますが、新品種をどんどん継続してリリースしていきたい。生産者に選んでいただけるさまざまなバリエーションの品種を用意することが我々の使命だと思っています。

〈了〉